

卷頭言

教育と医療

木田 宏*

教師が生徒を教え、親が子を育てるというのが、教育の基本的な型であり、医師が患者を治療するというのが、医療の基本型である。一方が主導的な立場に立ち、他方が受動的な立場に立って、その間に、相互作用が行われる、という点で、教育と医療は、極めて類似した人間関係に立っているといえる。

主導的な立場に立つゆえに、共に先生と呼ばれる教師と医師。その手腕、力量によって、教育や医療の効果に、顕著な差異が生ずることは、言うまでもない。医師が患者に対して、生殺与奪の立場に立ち、教師との出会いによって、生徒の生涯が左右されることのあるのも、事実である。

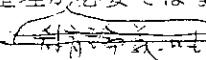
しかしながら、病気が治るのは、基本的には、患者自身の持つ治癒力、生き運まで含めた生きる力によるのであって、医師の力によるものではないという一面も否定できない。教育の成果も、各自の学習努力によるのであって、教師は単にその動機付けを行ひ得るに過ぎないとも言われる。子供は親の思いどおりには育たず、ダメな親、悪い環境もまた子供を育ててくれるというのも、一面の現実である。

教育も医療も、その効果は、基本的には、

受動的な立場にある、受手の側の受け止め方次第であるということになる。受動的な生徒や患者が主体的な役割を持つというのも、結局、人間の生存能力の基本にかかわる点において、教育も医療も同じ類の営みであるからではないであろうか。

同じと言えば、教育も医療も、本質的には一個の人間の生存の問題でありながら、社会的な問題、社会的な運命共同体の問題、それゆえにまた、社会制度の問題として、その対応がとられなければならない点も、同様である。流行する病気の対策、住民の教育水準の向上は、古くから為政者の重要な政策課題であった。今日、その課題は、ますます重要性を増すばかりである。

教育制度は拡大し、医療制度の整備も進んで、教育費、医療費は高騰する。当然のことながら、教育や医療に対する社会保障や環境改善の施策も進められることになる。

ところで今日、教育荒廃と言われる諸現象をめぐって、改革論議が活発である。それは制度として対応すべきことか、環境改善を要するのか、それとも、基本に立ち返って、個別の対応にゆだねることか。医療、医療制度の諸問題と対比すると、そこに論点の整理が必要ではないかと考えるのである。

* 木田・ひろし (1922年生)
日本学術振興会理事長。

真